

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

私のリズムで進む

横浜市立篠原中学校

三年 矢部宮瑚

私は障害者ダンサーだ。私には生まれつきデュアン症候群という目の障害がある。デュアン症候群とは目を上手く動かせなかつたり、物が二重に見える目の障害だ。

私はそんな障害を持つていて幼少期から病院に通い、沢山検査を受けてきた。しかしどんなに検査を受けても自分の納得のいく結果が返つてこず悩んでいた。また障害のせいで小学生の頃から嫌な思いを沢山してきた。小学生の頃までは自分の目が動かせない見た目で嫌がらせを受けて悩んでいたが、中学生になるとまた大きな悩みが増えたのだつた。それは「踊りにくさ」だ。4年前、私はダンスに出会つた。中学生になつてから本格的にジャズ

ダンスを中心に様々なジャンルのダンスに挑戦した。ダンスでは何も気にすることなく自由になれる、そう思っていた。しかし2年前、障害のせいでうまく踊れないということに気付いた。見た目だけではない悩みも増えたせいで、当時は本当に辛かつた。その後も大好きなダンスに全力で打ち込むことができず、しばらく辛い日々が続いた。

そんな中私は偶然東京パラリンピックの閉会式で年齢や性別、様々な障害を超えて踊るダンサーたちを見た。そのステージでは様々な要素をもつたダンサーたちひとり一人が主人公のようにキラキラ輝いていた。私はそれを見て「障害はその人の可能性を否定しない」のだと感じた。また障害があるということは不便だけれど不幸ではないということにも気付いた。そして私は2年前、初めて自分の障害と共にダンスコンテストに挑戦することにした。はじめは障害のせいで自分の踊りたいように踊れないことが多く悩んでいた。踊りながら目がうまく動かせない。という自分の目の障害とどう向き合つていけば良いかを考えた結果、私は移動で他のダンサーとぶつかる恐れがないよう、コンテストにはソロで挑戦した。次に目が動かしやすい向きで、障害に気を使わずに自由に踊れるような振り付け、曲選びを自分で行つた。そして沢山の人の助けを受けて、初のソロコンテストで全国大会にまで上り詰めた。ソロコンテストで自信がついた私は3ヶ月後に友人と新たなダンスの作品を作つた。その作品でも私たちは全国大会で準優勝を取ることができた。今までのダンスでは大人数で踊るものが多く、周りに合わせてばかりな自分がいた。しかし大人数ではなく個人でのダンスで勝負をすることで、新たにあることに気付いた。それは「みんなと同じに正解を求めずに私にしかな

い正解を求めていく」ということの大切さだ。

障害を持つても持っていない人にはそれぞれ捉え方、ペース、特徴などの違いがある。その違いをみんなに合わせる必要はない。きっとその違いを自分にしかない強さに変えられるからだ。またそう思うのと同時に、私は障害を持っている人も輝ける、生きやすい世界になつてほしいと強く思う。自分の障害を受け入れて生きていくということは本当に大変なことだ。だからこそ世界で障害、違いを持つている人を理解し認め合う心を持つてほしい。そうすれば多くの人が心地よく過ごせる世界となるだろう。

私の将来の夢はダンサーだ。「自分にしかない正解」を伝え、多くの人に勇気を与えるようなダンサーになること、それが私の夢だ。